

特別 寄稿

農業と野生の科学

明治大学 特任教授／野生の科学研究所 所長
中沢 新一

「野生の科学」という考えを、わたしは若い頃から暖めてきました。わたしは大学では人文科学という人間についての学問を研究しましたが、もうその頃から自然科学の破竹の勢いに、人文科学はたじたじとなっていました。心のことは脳の自然科学的研究ですっかりあきらかにすることができるし、生命のことは遺伝子をめぐる分子生物学で解明されるにちがいないから、いままでおこなわれてきたような人文科学の方法は近い将来役に立たなくなってしまうにちがいない、という考えが大手を振って登場するようになっていました。しかしわたしはそのような考えは間違っていると考えていました。

人文科学は近代的な形態に話を限定したとしても、少なくとも三百年を越える年月を注いだ知識の集積がある学問です。人間の認識や社会の本質についての深い探求を多方面にわたって繰り返し広げてきました。その大きな特徴は、自然科学がベースにしている合理性よりもさらに拡大した合理性、すなわち超合理性が、人間の知性のなかには存在しているということを前提に進められてきたことにあります。人文科学とはいわば、情報や機能には還元できない活動が人間のなかに作用しているということを研究してきた学問なのです。

今こそ人文科学をもう一度、新しい地盤に立って再生するための試みが行われなければならない。そうでなければ人文科学はやせ細っていくし、自然科学とのバランスも取れなくなってくることは明白です。それは人間理解をゆがめることになりかねません。今まで

人文科学が蓄積してきて、未だに十分には利用されていないこの知識の集積体を新しい形に変容させ、人文科学の固有の学問を成り立たせる基盤をもう一度取り戻すことによって、自然科学との知の集積体としてのバランスを取り戻すために、自然科学も人文科学も「野生化」しなければならない、とわたしは考えるようになりました。そして紆余曲折をへて、明治大学に「野生の科学研究所」という、耳慣れない名前の研究所は生まれる事になりました。

「野生の科学」とはなにか

野生の科学研究所という名前は、1960年代のフランス人の人類学者クロード・レヴィ＝ストロースという人が書いた『野生の思考』という本に由来します。レヴィ＝ストロースは、人間の思考には「野生の思考」と「飼いならされた思考」の二種類があると記しています。現代世界は「飼いならされた思考」の世界である、と。それらが都市空間や合理的な経済システム、社会システムなどに実現されているわけですが、人間の心の中にはそれだけでは理解しきれない領域が未だに生き続けているのだということを表現しようとして、レヴィ＝ストロースは「野生の思考」という言い方をしました。この研究所の名前には、そのことへのオマージュが込められています。

今、人文科学自体が現代経済学の影響を受け、功利性や合理性という方向へ流れはじめ

ています。けれども、それとは違う土台に立った学問を構築しなければなりません。しかもそれは学問として厳密な構造的性を持っていないわけですから、あくまで「科学」と呼ばなければいけないものです。それは人文科学の最良の部分が常に目指してきた部分であって、その意味では野生の科学研究所は、人文科学の最良の部分の伝統の上に立って、それを現代に復活させようという意図を持っているのです。

この研究所はいみじくも2011年3月11日の大震災の直後に発足しています。このことは大きな意味を持っています。日本人が3.11という出来事を通じて直感したことは、自然という存在の大きさや人間を越えた力、複雑さ、多様性といったものが、現代においても依然として存在し続けているという事実でした。それを目の当たりにして自分たちの世界の作り方、ライフスタイルを変えなければならないということを実感したわけですが、その日本人の変化と僕らの目指していることが合致したのだと思われました。その意味では人文科学の再生という最初の意図をはるかに越えて、日本人がこれから目指すべき世界観や哲学を構築していく実験の場所になっていくということが鮮明になってきたといえるのかもしれませんが。

そもそも農業とはなにか

そういう時代の変化の中で、農業の重要性が見直されるようになってきています。いま農業を取り囲む現実にはとても厳しいものがありますが、そういう時代であればこそ、とくに若い世代を中心に農業への感心が高まっています。その原因は農業という産業の持つ

特別な性格と構造にあります。現代人がいま危機を感じてそこからの出口を探そうとしているときに、農業の持っているその特別な性格というのが大きな意味を持ち始めています。

現在の社会は商品で構成されています。商品というのはお金で買うことができるものです。お金が社会の人間関係の重要な部分をつくりあげており、土地、自然（水や空気）までお金で換算のできる「商品」として扱われることができる、そういう時代に生きています。ところがそういう時代にあっても、農業には「商品」になり得ない部分があります。

「商品」になるためにはお金を介在させた等価交換ができなくてはなりません。しかし、人間と自然のあいだにこの等価交換は成り立たないのです。農業という場においては、その営みの大部分を自然の中に置き、人間が自然の中に入っていきます。その場では、人間が自然であり、自然が人間であるという、特別な「交差（キアスム）の空間」というものが成り立っています。その交差空間の中で、農業者は土地を愛し、自然を愛する気持ちの上に立って、農業の技を行います。愛するとか、深い感情が湧くというのは、こういう交差空間でしか起こりません。相手のことがよくわかり、相手がなにを求めているのかもわかった上で、その要求に応じて自分の持っているものを差出したり、相手の要求に応える。そのときはじめて愛情というものは湧いてきます。農業を営む人たちはそういうふうにして、土地や作物を愛してきました。

農業の作業の多くの部分は、人間と自然が一体になった交差空間でおこなわれていますが、そこでは等価交換（商品交換）というも

のは行われません。確かに、種や農機具を買うなどの行為にはお金が発生します。しかし、自然が人間に与えてくれるものをお金では計算できず、また、人間が自然にそそぐ労力やきめ細かい手入れ、愛情も貨幣換算ができません。それが、現代のあらゆる産業の中で、農業を特殊なものにしています。

現代における「交差空間」の運命

ところが現代の産業の多く、第一次産業や職人などを除いた産業は、貨幣をベースにして行われています。労働力も商品ですし、労働者の労働が作り出す製品も、「商品」になる前提でつくられています。工場設備から労働力、原料にいたるまで、資本（お金）を元に商品として交換し、集積して、それを加工したり組立てがおこなわれます。労働力でさえ、それは「労働時間」という商品としてこの仕組みに組み込まれているのです。

そこでは、農業のように、自分がつくっているモノと、人間のあいだに深い情が行き来するということがありません。ベルトコンベアに乗って目の前を流れていく「商品」の材料に対して、格別の愛情を感じる労働者はないでしょう。つまり、その場においては、モノと人間の交差空間が成り立っていないのです。モノと人間とのあいだに交差空間が成り立つためには、それが商品として売られても、誰かがそれを買い求め使用するというプロセスを経ねばなりません。購入されてはじめて、その個別性のもとで交差空間が発生し、「この」ボールペン、「わたしの」ノートとして大事に使われ、「その」モノとのあいだに愛情に満ちた交差空間がつけられる。消費にはこのように特別な性格が宿っています。

今日の産業が作りだすたいがいのものは、消費過程を除いては交差空間に属していません。ところがこの交差空間が、生産過程においても形成されているという点で、農業は大きな特性をもっています。貨幣が介在できない空間で、情や思いやりが効力を発揮するのです。ここでは技術を介在させた交歓が行われています。交歓とは呼びかけに応えるということです。自然の呼びかけに応じて人間が手を加え、雑草を抜き、肥料をやって、害虫から守り、温度管理をし、水を与えます。その呼びかけに応じてよい作物ができる。この交差空間の中ではこのように、自然と人間の対話が行われているといってもよいでしょう。この対話に、お金は関係していません。

この空間を出ていくときにはじめて作物は「商品」となり、貨幣換算できる存在として、農家さんに収入をもたらします。たしかに農業にも貨幣は関わってはくるものの、それをもたらす大半の部分は貨幣に換算できない自然と人間との相入、愛情を介した交差空間から生み出されてくるのです。生産の現場そのものが交差空間になっているのです。

こういう構造の中から農業を基盤とした農村の文化、共同体というものが発生してきました。これは日本列島でも数千年の歴史を持っています。そしてこの交差空間を強くし、その中で実現されている人間と自然の「結び」の意味を改めて認識し、結びの構造そのものを強くしていくために、地域地域でのお祭りやさまざまな文化が発達してきました。ですから「民俗」といわれているものは、その交差空間を背景として生まれてきているもので、そこが都市生活の中でつくられる疑似共同体の作りだすものとは本質的に異なると

ころといえるでしょう。

幸福のあり方

人間が生きていく上で、あるもの全てが商品化された社会になってしまうということは、人間という生き物にとって決して幸福なことではありません。なぜならば、人間は記号や象徴としての貨幣や言語を扱うのと同時に、身体をもった自然であるからです。人間の身体の中には自然の領域があり、脳の活動自体が自然に深く根ざしたものです。ですから、人間の幸福感というのは、人間と自然や、人間とモノ、あるいは人間と人間のあいだにお互いの隔たりを超えていくような交差空間ができた時にはじめて体験されるのです。

近・現代社会が豊かになり、便利になる一方で、幸福感を得難い社会になっていることの大きな理由は、この交差空間が実現されないことによるものではないでしょうか。たとえば都会生活の中ではあらゆるものが交換と消費で構成されています。村の共同体の行事や祭りの代用品として都市では劇場や映画館が提供され、ここではエンターテインメントが行われますが、これもすでに商品となったものです。一見そこに実現されているかに見えるアイドルとファンの交差は、商品に媒介されるものですし、一定の時間が終われば交差が実現しているかに見えたその空間は消失し、双方向的な持続はありません。

これまで交差空間は「家族」の中にごく自然に実現されてきましたが、その家族じたいの構造がゆるみ、解体されているために、交差空間として機能しなくなってきました。女性の社会進出によって、女性の役割も変わってきました。社会に出て働くというのは、

商品化の原理によってできている世界の中で、自分の生命を消費していくという意味ももっています。かつて女性は、家の中で家を守り、商品化された労働とは異なる、家事や育児という技術によって、土地や、家や、家具や、庭、そして家族（人）との幸福な交差空間を実現することを求められていたわけですが、現在ではそれには高い価値付けはあたえられなくなっています。そしてこの方向性は今後さらに拡大していくと思われます。

人間の幸福感はどこからくるか。人によってなにが幸福かということの意味は異なるでしょうが、しかし、幸福感が発生するのが交差空間であることは間違いのないことです。一方で、生活のあらゆる面で、それを解体するような方向で商品化の社会が進行しています。長いこと、農業というのは土地、国家や関税などの仕組みによって、その商品化の流れが完全に入ってこないような免疫力が働いていました。ところが、いま起こっているのはそれを様々な方向から解体するような動きです。資本主義は、資本によって全てを「商品」にし交換可能にすることを欲望し、さまざまな種類の交差空間を解体しよう求めています。

この欲望は現在のグローバル資本主義の中でいよいよ強くなってきています。グローバル化された社会では、土地や、地域と結びついた共同体から人間が引き離されて、ただの「労働力」という商品として資本との結びつきを求められ、「なにかへの帰属」から引き離されるようになっていきます。そのようにしないと、資本主義は理想的で、合理的な活動ができないという仕組みになっています。ですからそのために自由貿易を求めます。民族や

国民国家の枠を取り払い、市場や経済がスムーズに流れやすくする、そのための要求が増していきます。今回のTPPが農業にとって大きな打撃になるというのは、産業としての農業が大きな打撃になるということに留まらず、農業という産業を支えてきた、人間と自然のむすびがつくりだす交差空間自体を破壊していくということにつながってしまう。そして土地とのつながり、あるいは地域に生きている人間同士のつながりが解体されていきます。そのことが最も危険な効果を産み出します。

わたしたち人間が幸福に生きることの意味を根底から考え直してみたときに、人間と自然、人間とモノ、人間と人間のあいだに形成されるこの交差空間を持続的なものとしてつくりあげる、しかもそれが、消費のみに留まらず、生産と消費の全サイクルに渡って実現する構造をつくりあげることが非常に重要になってくると思われます。農業の中にはそういう仕組みがまだ生きています。わたしはこのような理由で、農業を重要であると考えているのです。

このような考え方をいろいろなところで話しておりましたら、JA愛知東の組合長である河合勝正氏が、これに大変な関心を持ってくださいました。関心を持つだけでなく、一緒に語り合ってみると、河合組合長自身が、生活、仕事の現場で全く同じことを志しているということに気がつかれました。そこで河合組合長の考えや、考えていること、作りたいと望んでいることと、わたしたちの研究所が考え、望んでいることを結びあわせて、その中からなにか新しい豊かなものが形成されてこないだろうかと考えて、協働の活動をは

じめました。

幾度にも渡る話し合いや、調査の後、今度は河合組合長からJAの女性部の人たちと会ってください、話をしてくださいという依頼がありました。河合組合長には深い考えがあったのです。わたしたちの研究所が考えていることや、河合組合長が目指していることを、理屈ではなく体感的に最も深く理解してくれるのは農村部の女性たちであろうと、河合組合長は考えました。わたしじしんの体験でも、男性の指導性を生かすも殺すも、男性の活動を後ろで支え、現実の力として育てていくのは女性の力であろうと思います。そこでぜひとも彼女たちの話をうかがいたいと思い、今回JA愛知東の女性部との懇談会が開催される運びとなったのでした。その時のレポートの一部をご紹介します。

(JA愛知東女性部・懇談会報告)

野生の科学研究所レポートから

現在、愛知県の4つのJAと野生の科学研究所は、これからの協同組合や農業のあり方について話し合い、協働企画を進めています。2013年8月27日(火)、中沢所長は愛知県・新城市を訪れ、JA愛知東の女性部役員の方々との懇談会を行いました。中沢所長による講演とともに、女性部のさまざまな取り組みや、直面している課題などについて、活発な意見交換が行われました。

今回の懇談会の主催者である「JA愛知東」の河合勝正組合長は、以前より中沢所長の考えに深く共鳴し、JAが抱えている問題や、山間部農業のさまざまな問題について、地域で考え、活かしていきたいと考えていました。

そのような対話の中で今回の企画が実現。まずは、JA愛知東の女性部の方々へ、中沢所長による講演が行われました。

「自然の叡智」を取り戻すために

中沢所長と愛知との関わりは、2005年に開催された「愛・地球博」にさかのぼります。中沢所長が関わった万博の初期構想で、テーマとして浮上してきたのが「自然の叡智」でした。このテーマの生まれた背景には愛知県瀬戸市にある「海上（かいしょ）の森」という里山がありました。当時、この「海上（かいしょ）の森」を切り出して万博会場とした後、住宅地にするという計画が持ち上がっていたのです。しかし、そうではない豊かさの方向を考える中で、「万博といえば大きなパビリオンをいくつも建てるという定石のあり方ではなく、この先の豊かさとはなにかを考え、「森」そのものが会場となるような、自然からの呼びかけに満ちた、まったく新しい万博のあり方」を考えたといいました。そこで出て来たのが「パビリオンを“建てない”万博」というアイデアでした。

「人間の知恵だけで世界を勝手に作り変えることをやめ、自然——つまり動物や植物と人、両方で良い世界を作っていく」。そんな思想のもと、開催が決定した愛知万博でしたが、その後旧来型の万博へと方向転換。構想メンバーがこだわった「海上の森」は守られたものの、「自然の叡智」という言葉だけが一人歩きし、残念ながら当初思い描かれた思想が体现されることはありませんでした。

中沢所長は、「里山」にこそ、日本の伝統文化、残していくべき「自然の叡智」が残っていると

話します。

「里山というのは日本の景観、生産の場所でもあり、日本の美しい文化、伝統の象徴で、農業がベースになっています。そこでは、人間がやりたいことと、もともとそこに棲んでいる動植物らとが、互いに要求していることを持ち寄って、交渉して、両方のいいところを取り出しながら、里山の秩序は成り立っているんですね。人間だけの慮りだけでできているわけではなくて、自然の知恵がすでに組み込まれている場所なんです」（中沢）

里山をつくりあげた日本人の知恵。それは「世界に冠たる伝統」であり、それこそが「自然の叡智」であるということ。人間側と自然が呼応しあって、親しみ合って、両方にとって、不幸せじゃない田畑をつくり、そしてそれが生業として暮らしを支える生活が、日本人の文化を作ってきた根幹でもありました。

「歴史のなかで作りあげた文化、暮らしの土台がいまに生きている場所。それが農村部なのではないか。土地に人が住み、生業をやり、そのなかで、古い日本人の作ってきた知恵がつながっていく。それを新しく成長させていくことがいま求められているのです」（中沢）

そうした、日本人がこれから何を大切にして、原理として生きて行かなければならないのか。それは野生の科学研究所の大きなテーマでもあります。

その中心であり、きっかけとなるのは、やはり「農業」なのではないかと中沢所長は考えています。

いま揺らぎつつある「平和」であるということ。それは日本人の民族の土台となる考え方でもあり、農民にとって重要な要素でもありました。戦争は土地を荒れさせ、労働力も失ってしまう可能性がある不要なもの。そうした平和思想のベースにも、やはり農業がありました。

「農村の思想、原理みたいなものを、現実の生活や、生業のなかでうまく取り込んでいくやり方はないのか。引き継ぎ、守っていく以上に、もう一度、現代の世界でどう活かしていくのか。そういったことを一緒に考えていきたいと河合組合長と話し合ってきました。日本の農村も、JAも変わっていかなくちゃいけない。いいものは残しつつ、無駄なものを切り捨てていく。その第一歩として今日があるのでは」と中沢所長は話を締めくくりました。

農業を取り巻く厳しい現実

愛知県の北東部に位置する中山間部のJA愛知東の女性部の活動について、お話しいただきました。地域の女性たちが集まり、食や農に関する教育事業、管内の農畜産物を使い、地産地消を目指すお惣菜やお弁当、加工食品などの販売業、地域の相互扶助となるコミュニティサービス事業などを展開しているとのこと。

今回の懇親会の昼食として出していただいたお弁当は、「助け合い組織 つくしんぼうの会」の方々の手によるもので、地元産食材を使い、味は玄人はだし。規格外の梅を使いジュレタイプの梅ソースにしたり、柿を使った柿酢やポン酢などを地域の直売所などで販売し、その他にもデイサービスや地域のイベントにも参加したりなど、地域になくてはならない存在になって

います。

また、質疑応答では、実際にいま直面しているさまざまな問題についてのお話もうかがうことができました。たとえば、過疎や人口減少の問題は、次の世代の担い手不足の問題とも深く関連しています。

中でも、普通のなすが赤身のマグロなら、それは大トロにたとえられるほどのおいしさだという、愛知県の伝統野菜に認定された設楽町の「奥三河天狗なす」。作り手の佐々木富子さんは「これが愛知県内の市場に出回らないのはおかしい」と問題提起をしました。たとえば「奥三河天狗なす」の価値を理解してくださる消費者に直接販売していくこと（あるいは日本的なCSAを選択することなど）も解決法のひとつかもしれません。そのためにはその「おいしさ」を伝え、どこで食べられるのかも合わせて伝えていくことが大切です。しかし、PRしても、作り手がいなければ本末転倒。出荷するほどつくるには人手が足りないし、作り手は年寄りばかり。若い人が都会へみな出て行ってしまい、山間地域でこれをどう残していくのか、その術はあるのか、悩んでいるといます。JA愛知東女性部の方々が感じている問題は、実際の暮らしに根ざした切実な問題でもあり、この地域に限ったことではないのではないのでしょうか。

「自分たちのやっていることの価値をあげて行くこと。地域や特産物の魅力を掘り起こし、発信していくことが大事なのではないか」と中沢所長の言葉通り、なにが大事か、何を守って行くべきなのか、もう一度見つめ直すきっかけを与えてくれる、有意義な懇談会となりました。

この懇談会を通してわたしはとても心強いものを感じました。それは農業をやっている女性たちが、とても明るく、自分たちの仕事を楽しんでやっている、そして自然と自分とのあいだにつながりをつくりだしていくことに喜びを見出していることが、はっきりと見えたからです。わたしたちはJA愛知東との協働を通じて農業というものが持っている現代における重要性や価値というものをもう一度自分たちではっきりと自覚することができました。この産業を守り、育て、いろいろなやり方で次の世代へつないでいく仕事を行いたいと感じています。

中沢新一 プロフィール

1950年、山梨県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。

思想家、人類学者。現在、明治大学特任教授／野生の科学研究所所長。

『チベットのモーツァルト』でサントリー学芸賞、『森のバロック』で読売文学賞、『対称性人類学—カイエ・ソヴァージュV』で第3回小林秀雄賞、『アースダイバー』で第9回桑原武夫学芸賞など受賞。

その他、『精霊の王』『緑の資本論』『日本の大転換』など著書多数。